

## 講演会 日本の放射能被害を防ごう

### ウクライナのタチアナ女史が語る 「低線量汚染地域・健康被害の真実」

# 事故後27年のチェルノブイリから考える

#### 調査報告

福島原発事故で、どのような被害が出るのか、それには、チェルノブイリ原発事故に学ぶしかありません。

食品と暮らしの安全基金では、ウクライナを訪れ、多くの子どもが健康障害で苦しんでいる実態を知りました。

「足が痛い」「頭が痛い」「自律神経失調症」「風邪をひきやすい」「鼻血」「疲れる」「心臓が痛い」……

取材したのは、空間線量が東京とほとんど同じ地域です。

その子どもたちの食べものを変えて元気にする術を見つけました。

私たちの調査に協力してくれているのが、自身も、健康被害に遭っていたタチアナ・アンドロシェンコ女史です。

タチアナ女史の話は、日本でも、これから起きると考えられる健康被害を少なくするために、聞かなくてはならない内容です。

タチアナ女史の報告をうけ、松井英介医師、小若順一食品と暮らしの安全基金代表、そして山本太郎議員によるシンポジウムを行い、チェルノブイリの事実を、日本においてどのように受け止め生かして行くかを話し合います。

◇11月21日(木) (資料代800円) 要予約

13:30 ~ 16:40 (希望者) 交流会 17:00 ~ 18:00

会場：衆議院第一議員会館・多目的ホール

国会議事堂前1番出口 徒歩5分、永田町1番出口 徒歩5分



当日出席予定の山本太郎議員

<お申込>

☎042-391-7102(松崎)

◇ホームページからも申し込めます。

被曝問題研修会「ウクライナから低線量被曝の実態報告」  
<http://tokyotimothy.blogspot.jp/>

<お問合せ>

048-851-1212 (食品と暮らしの安全基金)

<主催>

11.21 東京実行委員会

NPO 法人食品と暮らしの安全基金



1967年生まれ。看護師、フランス大使館勤務を経て、現在は「食品と暮らしの安全基金」調査コーディネータ

チェルノブイリ原発事故が起きた1986年4月末から30km圏は避難地域になり、原発から遠ざかる道は、避難の車で大渋滞していました。

その脇の空いた道路を反対方向に向かって車を走らせていたのが、妊娠中のタチアナさんです。

タチアナさんは看護師でしたが、放射能の知識はなく、出産のため、原発から30数km西にあるノーヴィミール村に里帰りしたのです。

結局、首都キエフに戻って女の子を出産し、村とキエフを行き来していたら、6年後の1992年に、全村民が180km南のコヴァリン村へ強制移住させられました。

◇16日(土) さいたま市産業文化センター (お申込・お問合せ ☎048-851-1212)

◇18日(月) 盛岡アイーナホール (お申込・お問合せ ☎019-605-3345)

◇19日(火) 仙台市民活動サポートセンター (お申込・お問合せ ☎048-851-1212)

◇20日(水) 福島県教職員組合郡山支部会館 (お申込・お問合せ ☎048-851-1212)